モダンテクノロジーは幸せをもたらしたか

W校　高等部一年一組

グレイ　ダニエル

今年の夏、家族でマーサズヴィニヤードと言う島へバケーションに行った。私たちは人里離れた築百二十年の家に滞在した。そこではインターネットがよく通じなかった。どこでもインターネットを簡単に使えると思っていた私はこれから退屈になりそうだと心配した。まず私はその古い家を見て回った。今でも台所には鉄製の薪を使うオーブンがあり、洗面所のシンクは妙に大きく立派な物だった。家中には湿気のある古い木の匂いが充満していた。

歩き回っているうちにこの家ができた頃の人々はどのような日常生活をしていたのかと想像し始めた。今の時代は電話やインターネットを使い簡単にコミュニケーションが取れると同時に、世界中の情報を素早く得ることができる。そのうえビデオゲームも楽しむこ

とができる。昔の人は手紙を書き何日も過ぎてからやっと相手に届くようなやりとりをしていたし、電話を使うにも電話代が高くて長い話はできなかった。新しい情報は新聞によって得ていた。

一方、今の私たちはモダンテクノロジーに頼り過ぎて電話がなければ安心できないと言う人が多くいる。人と会話して時間を過ごすよりテレビやゲームで楽しんでいる。子供の時夏の間この島に来ていた父の話によると、家族そろっていつもビーチに行ったり、テレビもなかったので夜は母親がピアノを何曲も子供たちに弾いてくれていたという。このようなことを考えて見ると、今は昔と比べ人々はより幸せを感じて生きているのだろうか、と疑問に思う。

もちろん猛スピードで進化しているテクノロジーは社会と切り離すことができないし、私たちの生活を豊かにしてくれている。しかしこの島に来て電話もあまり使わず、のんび

りと過ごした数日間を通し、日常からは得られない貴重な経験をすることができた。まず近所にお店がないのでファーマーズマーケットに買い物に行った。そこでは土地の人が育てた野菜やチーズを買うことができた。ハイキングに行った時には木の形が、背が低くてボコボコしていて不思議だった。海からの強い潮風を受けるとこうなるのかなと考えた。海に行った時の経験はいつもと全然違った。水が澄んでいる海では魚やクラゲがよく見えて嬉しくなって一緒に泳いだ。あまりにも楽しくて何時間も海に潜っていた。毎晩テレビも見ず会話をしたことは家族の絆を深める大切な時間になった。

私たちは時を共にし、人間同士のふれあいをもっと大切にしていくということが必要なのではないだろうか。

夏の記憶

W校　高等部一年二組
宮崎　真弥

今年の夏は、今までと少し変わった、新しい空気を纏いやってきた。異常気象やまちなみもそうだけど、何よりも変わっていたのは、「ひさしぶり。」人だった。

八月の半ばのその日は、じめじめと熱が体を離さない、そんな真夏の昼間だった。彼と会うのは丁度一年ぶり。去年と同じ浅草で少し早く着いた私は、朱色の門や建物が見せる、その美しさと、風鈴が奏でる夏の音をきいて、まるで日本の美しい景色を映し出したポストカードに潜り込んだ気分に浸っていた。

ふと、風の音が止まったかと思ったら、去年よりもずっと大人っぽくなった、君がいた。一瞬誰かと思ってしまった。黒くなった髪と清楚感溢れるその見た目は、去年とは随分変わっていた。

「何か、変わったね。」
予想外の出来事に戸惑いながらも気兼ねなく話しかける。するとパっと照れた顔から微笑んだ。
「あっ、」
「きみこそ。」
やっぱり笑顔は、
「変わったね。」
変わってなかった。
二人で雷門まで行きマロン味とりんご味のソフトクリームを食べながら他愛ない話をする。この一年どうだったとか、どういう出会いがあったのかとか。でも、どうして変わったかは、なぜか聞けずにいた。すると次の話題を始めたのは彼だった。
「実はさ、俺、すきな人ができたんだ。」
驚いた。何よりも、それを話してくれたことに対して、だ。
「そっか、おめでとう。」
どこかホッと、でも少し寂しい気持ちがこん

がらがって、複雑な気持ちが私を襲った。
「どんな人。」
コンクリートを踏み込むたびにコツンコツンと鳴り響く音が、風鈴の振動の荒波と観光客のざわめきをかき乱し、心をほんの少し揺さぶった。
「あぁ、私、聞きたくないんだ。」
彼がふと足を止めて振り返る。それに対して顔を上げると、目と目が、一瞬、合わさって。彼は意地悪そうな笑みをして、じっと見つめてからぽつりという。
「ひみつ。」
やられた。この感情に対して納得してしまった自分がいた。
どうやら私も変わってしまったようだ。

役に立つ化学、そのパワー

LI校　中等部三年一組
山口　浩

先週、僕にとって嬉しいニュースがあった。日本人の吉野章さんが他の二人の研究者とともにノーベル化学賞を受賞したのだ。カメラ、スマホ、パソコン、冷蔵庫など身近で生活に欠かせない機器に電気エネルギーを供給しているリチウムイオン電池の開発が世界一の賞の受賞理由だ。スタンリー・ウィッティンガム教授、ジョーングッドイナフ教授、吉野彰さんは一九七〇年から軽くて強い、充電できる電池の開発に取り組んだ。リチウムイオン電池は小型で電気を大量に蓄えることができる画期的な特徴がある。

僕がまず驚いたのは、三人の年齢だ。九十七歳、七十七歳、吉野さんは一番若くて七十一歳だ。僕からみたらおじいちゃんだ。研究をスタートしてから長い間、たくさんの失敗があったと思う。そんな中、チームを支えた

のは、未来の社会を作る情熱、環境に配慮した技術、何よりも人々の生活に役に立つものを作りたいという強い思いだ。九十を超えてもさらに新しい技術に向かって前に進んでいけるというのは僕たちにとってもすごいメッセージだと思う。やる気さえあれば年齢は関係ない。

リチウムイオン電池の研究は四十年にもわたる。一九七三年にエネルギー界に大きな事件が起きる。石油ショックだ。石油は有限な資源だ。石油がなくなれば、他のエネルギーを探さなくてはならない。当時は、一回使ったら再生できないアルカリ電池だけであった。使い切った後も充電して再利用できる二次電池開発の間に、人々の生活は大きく変わった。パソコン、スマホは人の生活スタイル、働き方を変えた。僕自身は生まれたときからこれらのものがあるのが当たり前だった。宿題で何か調べたり、情報を得たり、好きな曲をギターで弾くためにコードを探したり、リ

ズムを取ったり毎日パソコンとスマホは欠かせない。でもその陰には多くの開発努力があった。

リチウムイオンは環境問題にも貢献している。例えば、電気自動車は環境に優しいが、リチウムイオン電池でないとだめらしい。巨大な蓄電システムがいるからだ。社会と環境のために役に立つ化学は何よりも大事だと思う。

僕も高校に入って化学に夢中になっている。化学の一番好きなところは、ある物質が全く姿を変えてしまうところだ。夏にやった実験では、水酸化ナトリウムとアルミと水を反応させて水素ガスを発生させて風船に入れてみた。それを洗剤の水溶液に入れると泡ができ、その泡にライターで火をつけるとポンっと大きく燃えて面白かった。パイプクリーナーなどすべて家にある素材で実験ができた。

僕が何かを実験するのは、結局世界を知る

ためだ。電池の中身はどうなっているのか、なぜある気体は燃えるのか。なぜ知りたいかといえば、すべては化学だからだ。こころや感情の動きも実は脳の中の化学変化だ。食べ物を食べること、薬を飲むこと、眠ることなどもすべて化学で説明できると思う。僕の夢は、化学を自分の興味だけでなく、もっと勉強してその仕組みを知ることだ。そして未来の人々の生活に役に立てるための研究をしたい。一人で世界を変えるのは難しいけれど、一人のアイデアが世界を変えることがある。僕の夢は世の中を便利にする化学を発明してそのパワーで人々を幸せにすることだ。

十五歳のチャレンジ

LI校　中等部三年一組
福田　徳道

「何で、こんな所に住んでいるの？ロングアイランドなんて、嫌だ。」

八月末にロングアイランドに引っ越してきた私達。高校シニアの姉と、会話のトピックは大体引越しの話ずくめの九月でした。

私はカリフォルニア州生まれ。育ったのは、ミネソタ州。その後はニューヨーク州バッファローに引っ越し、五年間過ごしました。こんな経歴を持つ人は、他にもいるかもしれません。でも、今回の引っ越しは、私にとっては抵抗できるものならガーンとぶちあたって、ぶち壊したい引っ越しでした。

私は八年生まで小規模の私立の学校に通いました。そのサイズは、今通っている補習校よりさらに小さく、生徒も先生もお互いをよく知っていて、いわば家族のようなものでした。その学校を卒業してから、学区の公立高

校に通い始めたのですが、校舎、生徒や先生の数に圧倒され、ショックを受けたのを覚えています。高校進学当初、「前の学校に帰りたい！」とこっそりベットの中で泣いていたのを母に目撃され、母には、「卒業した学校にはもう戻れないでしょう。新しい学校は大きい分、沢山チョイスもあって、友達も部活も選べるんだよ。きっと楽しいと思うよ。」と励まされました。それでも、一週間ぐらい泣いていたのを覚えています。丁度その時、姉は高校を卒業して大学へ進み、妹は幼稚園を卒業してキンダーに進み、三人とも新しい環境に慣れず、毎日ボロボロ泣いていました。姉は電話口で家に帰りたいと泣き、妹はママと家に居たいと泣き、私も新しいマンモス高校に圧倒されて泣き、泣いていなかったのは、大学三年目で余裕顔をしていた兄と、高校三年目の姉だけでした。母が笑いながらよく言います。

「あの頃、三人しておいおい泣くもんだから、ママは順番に『大丈夫だからね。』と声かけするのに、毎日大変だったんだから。」
と。
そして、まさかの新しいロングアイランドでの生活。九年生の時なんとなく私の高校生活の行く先が見えていたのに、また何も見えなくなってしまいました。一からやり直しです。しかも、たった二人のクラスだったバッファローでの補習校のクラスと大違いのニューヨーク補習校。以前私ともう一人のクラスメートは、本当に家族みたいな関係で土曜日を過ごしていた私は、ニューヨークの補習校で、クラス見学をしたときは、目がくらくらして、倒れるかと思ったほどです。二人並んだ席から二列の席。
「私には、無理だ。」
「無理」以外の言葉は私の頭には浮かばず、また母に泣きつきました。母は、
「一緒に頑張ろうね。」

とは言ってくれたものの、授業を受けるのも私。宿題をやるのも、テストを受けるのも私。正直なところ、机に向かいながらいまだに涙が出ることもあります。

今の補習校の仲間たちは、幼児部からずっと一緒だったとか。そんながっしりと肩を組んだようなクラスに入れるのかと、ずっと不安だった私ですが、私に気を遣って、みんな声をかけてくれたことに感謝しています。

この先もどれだけ自分がこの環境に耐えていけるのか自信がありませんが、せっかくの大都会近くへの引っ越しをチャンスと思って、ポジティブなものの見方を身につけ、私が将来情熱を注げるものを探していきたいと思います。そして、旧友も新しい友達も大切にして、友情を育んでいきたいと思っています。

日韓関係とんポップ

L工校　六年一組
堀江　沙良

「日本と韓国は、どうやらあまり仲が良くないみたいだ。」

今年の夏日本に行った時、私はそう感じました。それは、毎日のように、テレビで両国の対立問題について取り上げられていたからです。アメリカでは、そんな頻繁に日韓関係の話題は取り上げられないので、両国が仲良くないということはあまり感じませんでした。後で両親から、昔の戦争時代のことや領土問題など、日本と韓国の間には長い歴史的な問題があることを聞きました。私は日本と韓国が仲良くないと聞いて、残念な気持ちになりました。それは、韓国は日本にとても近いお隣の国で、今までわりと身近に感じていたからです。

私の家族はみんな韓国料理が好きでよく食べるし、母は韓国ドラマが好きです。それに、

私の周りには韓国系の友達や知人もいて、みんなフレンドリーに接してくれるので、韓国は身近に感じていました。そして、私は何と言ってもKポップが大好きです。Kポップの中でも、特に私はTWICEというグループが好きです。台湾人、日本人、韓国人の合計九人の女子で構成されたグループで、韓国語と日本語と英語の三か国語で歌います。私は日本語と英語はもう知ってるし、韓国語は日本語と似ているところもあるので、親しみやすいのです。私は、TWICEのメンバー九人全員の名前はもちろん、歌の歌詞から振り付けまで全部知っているほどTWICEが大好きです。私はKポップをきっかけに、韓国語も習いたいと思うようになりました。

でも最近は日本と韓国の仲が悪いので、日本人メンバーのミナはストレスで病気になってしまい、サナは日本人だという理由で退出の要求をされていると聞いて、私はとても悲しくなりました。日本は戦争時代に、韓国や

韓国人に悪いことをしたかもしれません。それについては私も大変胸が痛みます。日本と韓国の間の歴史的な問題については、両国ともお互いに言い分があるようですが、全ての過去を知らない私にはよく分からないことも多いので、どちらが正しいと言える立場ではありません。けれども、一つ言えるのは、これらのバンドメンバー達には罪がないのに、過去のことで、この子達を責めるのはかわいそうだと思います。

日本がきらいだ、韓国がきらいだと言っているのは、テレビなどの情報だけに流され、お互いの国や人のことをよく知らない人が多いと思います。日本人はみんなこうだ、韓国人はみんなこうだとステレオタイプ化しないで、一人の人間として接すれば、たとえ考えに違いがあっても、同じ人間として共通点も見えてくるはずです。日本と韓国の人が仲良くなるためには、まず国を意識しすぎず、一人一人がお互いのことをもっとよく知って、

意見や考え方の違いを理解することが大切だと思います。そうするためには、両国の人達はもっと交流して、色々話すべきだと思います。そこで、何か共通の興味があると交流しやすいと思うので、私はKポップがそんな二国間のかけ橋になってくれればいいなと思っています。

私はKポップのことをアメリカで知りましたが、最近Kポップは日本でも人気があると日本の小学校に体験入学した時に知りました。TWICEのようなKポップグループは、日本人と韓国人が国境を越えて力を合わせ、素晴らしい音楽作品を作れるということを証明しているので、日本人と韓国人が仲良くなれるという、みんなの良いお手本になれると思います。だから、私はKポップがもっと日本に広まり、ファンが増えて、日本と韓国がもっと仲良くなるきっかけになってくれればいいなと思います。

「時は今だ」

L工校　六年一組
檳原　尚紀

エアコンやヒーターをつけるたびに地球温暖化にこうけんしていると考えたことはありますか。ぼく達はみんな寒い日や暑い日にヒーターやエアコンを使うのは当たり前だと思っています。でもエアコンを一時間つけると四キロワットの電気が必要で、その電気を作るには二・四キロもの二酸化炭素が作られます。二酸化炭素は地球と命を減ぼします。要するに、人間は自分達と他の生物を減ぼしているのです。

ぼくは九月二十日に、グローバル気候マーチという世界中の人がいっしょになって地球温暖化をやめさせようと呼びかける集会に参加しました。そこには、大勢の人が特に子供達がたくさんいました。これがこのマーチの特別なところです。子供がこのマーチを企画して実行しました。その中心人物はグレタ。

トゥンベリという十六才のスウェーデンの人です。ぼくはグレタさんからたくさんのことを学びました。ぼくが一番好きな彼女の言葉は「地球温暖化の解決策はもうすでにあるのだ」という言葉です。ぼく達人間はそれを実行する努力をしようとしないのです。電気を作る会社はお金がかかるからも、と地球に良い電気を作りたくないだけです。大人たちは地球の将来を考えていません。地球が滅びる時にはもう死んでいると思っているからです。勝手だと思います。

「すべての未来世代の目はあなたたちに注がれています」。

これはグレタさんの言った言葉です。大人に任せておいたらだめです。だから、ぼく達子供が改革をしなければなりません。ぼくらはまだ若いです。頭が柔らかくてクリエーティブに考えることができます。いっしょに未来を救いましょう。次のそして次の次の世代の子供にメッセージを送りましょう。今動き

始めればまだ地球は救えます。ぼくはそう信じています。

みんなが協力していけば、小さな力が集まって大きくなります。みんなが協力していけば夢はかないます。これは本当です。マーチで何十万人の人達と一緒に行進している時、ぼくは自分を強く感じました。大勢の人の声が自分から出ているように感じました。そしてみんなで戦っていると感じました。こんなことは初めてです。ぼく達はニューヨーク、そして仲間達は、京都、ベルリン、ヨハネスバーグ、メキシコシティなどにいます。みんな違う所にいるけれど、願う事は一つです。それは、環境問題を解決することです。ぼくは興ふんしました。みんなとスローガンを叫びました。

「時は今だ。」

このスローガンは心に一番残っています。地球を救うには今、環境問題に取り組まなければなりません。もう待つ時間は一時もあり

ません。

大人は、自分達の知識と権力をお金に変えようとしています。しかし、それは地球、そして僕達の未来を滅ぼしています。僕達は一つだけ聞いてほしいことがあります。

「一緒に地球を救おうよ」。

七十四年前のあの日

L工校　六年一組
高橋　健

「ピカッ」

と、七十四年前の一九四五年八月六日、午前八時十五分にアメリカのエノラゲイが、リトルボーイという名前の原子爆弾を広島の町に落としました。原子爆弾は、地上から約五百八十メートルの高さで爆発して、沢山の人が命を落としました。

ぼくが前から、日本で行ってみたいと思っていた場所の一つが広島で、今年の夏休みに初めて行きました。夏真っ盛りの広島は、ニューヨークとは違って、本当に暑かったです。でも、七十四年前のあの夏の日は、きっとどんなに熱さの中、辛くて悲しい思いをしたのだと、広島の原爆資料館や原爆ドームに行って思いました。

原子爆弾を落とされた時、地面の温度は人

が一しゅんで消えてしまうほどの熱さでした。その様子を原爆資料館の説明や、被爆した人の写真を見た時、とても辛い気持ちになりました。

ぼくはアメリカ生まれのアメリカ育ちだけど、お父さんとお母さんは日本人です。アメリカは、原子爆弾を落とさなければ、戦争を終わらせることはできなかったのだ、という意見があります。広島に行く前までは、沢山の人が死んでしまったけど、戦争を終わらせるための最終手段だったから、しょうがなかったのかもしれないな、と思っていました。でも、広島で見た原爆や戦争の怖さは、ぼくの考えを変えました。

家族、友達など大切な人を一瞬で失う原爆は、よかったとは思いません。原爆は、その時だけでなく、その後の放射能というとてもおそろしいものを残してしまった人は、痛い思いをしながら死んでいきました。ぼくや弟と同じくらいの年の人たちも沢山被害にあい

ました。お弁当箱がぐちゃぐちゃになっていたり、その日に着ていた洋服に血がついて、ボロボロになってしまったりしたものを見ました。

ぼくの毎日は、七十四年前の広島や日本のように、毎日をびくびくしながら送ってません。

「あーまた宿題やんなきゃいけないからめんどうくさいなぁ。」

「ゲームをもっとしたいのに、お母さんからまたおこられるからなまも。」

と、自分のことしか考えていません。平和だからだけど、ぼくみたいに、みんなが自分のことばかりを考えていたら、また戦争が起きてしまうかもしれません。それでは、戦争で大切な人をなくしたり、死んでしまった人の歴史をむだにしたりすることになります。

自分のことだけじゃなくて、他の人のことも考えて、けんかをしないで話し合うことが大事だと思います。たとえ違う国の違う人種

の人でも、大切な人が死んでしまう悲しみはみんな一緒だと思います。もう二度と広島のようなことが起きないためにも、ぼくが出来ることが何かを、考えたいと思。た夏休みでした。

ゴール

W校　六年一組
那須　藍貴

「よし、チャンスだ。」

僕は思った。左側にいたキャムがゴール前にボールをけり上げ、そこに走って来た僕の目の前にボールが落ちて来た。僕は、少し右脚を後ろに振り上げ、すぐに思いっきり足を前にけった。ボールは空中で強く僕の足の甲に当たり、向きが変わり、ものすごいスピードでゴールに向かって行った。

僕は四歳でサッカーを始め、二年生で学区のトラベルチームに入った。そして、一昨年から、ブラストという、ウエストチェスターカップで優勝しステイトカップの出場権を得た強いチームに所属している。でも、僕は先発メンバーではない。チームの補欠としてベンチを温めていることが多い。僕は出場する時もディフェンダーでプレイすることが多く、なかなかシュートするチャンスはめぐって来

なかった。フォワードで出ても、ボールが僕の左足にあって右足にボールを移している間にディフェンダーに追いつかれてシュートが出来なくなったり、上手く右足でシュートをしても、ゴールキーパーの正面に行ってゴールは決まらなかった。だから、僕は公式戦紅白試合に出場したのに、一度もゴールを決めたことがなかった。チームの中でゴールを一度も決めていないのは僕だけだった。

僕はある問題を抱えていた。僕はボールが顔の近くに来ると、無意識にボールをよけてかがんでしまう。本当はあまり人には認めたくないが、顔にボールが当たるのが怖いのだ。それでも、僕はチームの練習も試合も欠かさず出ているし、父と一緒に練習もしている。練習試合ではシュートが何度も入っているのに、なぜか公式戦だけは決められなかった。

九月十三日、金曜日。僕は父と次の日に試合が行われるグリーンビル小学校のフィールドでシュートや、ボールをもらってすぐにけ

る練習を二時間以上もした。練習を終えた頃には、辺りはもう暗くなってしまっていた。

その翌日、新しいユニフォームを着て、僕は気を引きしめて試合が行われるフィールドに向かった。前日の練習のお陰で、僕はいつもよりもっと自信を持っているような気がした。僕は「頑張るぞ」と自分自身に活を入れた。でも、その日も僕は先発メンバーには入れなかった。試合開始十分、センターフォワードのラヒームと交代し、やっと僕の出番がやって来た。僕が入ってすぐ味方がゴールを決め、二対一となった。

その数分後、僕にそれまでなかったようなチャンスが訪れた。ファーポスト近くにいた僕にキャムが左側からクロスし、そのボールが空中にあるうちに、僕は右足で強くけった。スピードが速かったので、ボールはキーパーの横を抜け、僕のボレーシュートは、見事にゴールの右上コーナーに突き刺さった。

「ゴーーーーーール！」

自分がゴールを決めたことが信じられなかった。うそだと思った。チームメートが皆笑顔でハイファイブしてくれ、観客が歓喜の声を上げていた。僕は嬉しくて、顔全体で笑った。

その後、僕はディフェンダーにプレッシャーをかけ続けて、いっぱい走った。僕が急いで走って来てプレッシャーをかけると、一人のディフェンダーがあせって、僕の目の前でボールの上で転んだ。

「ここで決めなきゃおしまいだ」

一気に僕はボールにかけより、ボールを奪った。右足外側で一度ボールを少し右にけってから僕は思いっきりシュートした。僕がけった位置は少し遠かったのでキーパーは反応できたが、ボールにカーブがかかり、右にそれてキーパーを抜き、右コーナーより少し下にシュートが決まった。僕は、自分が一試合で二点も挙げたなんて信じられなかった。僕はさっきよりもっと大きな笑顔でチームメートとハイファイブをした。数分後前半が終了し、

コーチやチームメートが皆僕をほめてくれた。
でも、後半の先発メンバーには、やはり僕は入れなかった。僕はベンチで試合を見つめた。後半約十五分、ゴールキックの際に、僕はセンターフォワードと交代した。入ってすぐキーパーからボールをもらったディフェンダーに僕がプレッシャーをかけ、ラヒームがボールを奪った。ラヒームはディフェンダーにボールを取られる前に素早く僕にパスをし、僕はファーストタッチで必死にシュートした。またもやボールはキーパーの右を抜け、右上に突き刺さった。二得点の後、秘かにねらっていたハットトリックを現実に成しとげられたことで、僕の心は喜びに満ちあふれた。
ゴールを決めた僕には、新たなゴールが待っている。僕はもっと功撃的なプレイを出来るようになって、ゴールをたくさん決めたい。そのために、僕は今、たくさん走る練習をし、FIFAのゲームをしてサッカーの戦略を学んでいる。

プラスチックが与えるえいきょう

W校　六年一組
武神　恵実

昨年、理科の先生の机の上に不思議な物が置いてありました。それは、プラスチックバックのかけらがたくさん入った水の入れ物でした。先生は、海の中にはこのようなプラスチックゴミがたくさんあると教えてくれました。同じころ、プラスチックゴミが、海の生き物にひ害をあたえているというニュースを観ました。だから私は、未来がよりよくあるためには、プラスチックを減らすことがとても重要だと思います。

毎日、私たちは、たくさんプラスチックを使っています。ある報告によれば、毎年四百万トン以上のプラスチックゴミが、川から海に流れこんでいるそうです。そのゴミは、マイクロプラスチックとなって、世界中の海に広がっています。しかも、そのマイクロプラスチックは、完全に分解されるのに、千年近

くもかかるそうです。また、プラスチックゴミを食べて、ちっ息して死んだ海の生き物についての報告もあります。それだけでなく、マイクロプラスチックを食べた魚を人間が食べてしまうと、私たち人間にも悪いえいきょうがおよびます。

だからといって、プラスチックの使用を減らすと不便になると考える人もいると思います。しかし、プラスチックがなかった時代のことを想像してみてください。私たちは、プラスチックを当然のように使っていますが、使わなくても生活できるのではないでしょうか。それが無理だとしても、なるべく使わない、または、環境に優しい植物性のプラスチックを導入していくべきだと思います。この植物性のプラスチックは、とうもろこしなどの植物を原料としているので、分解するのに三から六ヶ月しかかからないし、環境への悪いえいきょうもありません。

このように、私はプラスチックの生産や使

用を減らすことによって、未来がよりよくなると考えます。まずは、再利用バッグを使ったり、プラスチックストローをなるべく使わないことから始めていこうと思います。一人一人がプラスチックの使用を減らすことを意識するだけでも、プラスチックゴミが減り、よりよい未来につながるのではないでしょうか。

やったなれたリレー選手

W校　五年一組
後藤　英璃子

毎年、夏休み前にリレー選手を決める時、私は三位か四位で、後一歩でリレー選手になれませんでした。五年生になり、リレー選手がークラス男女三人づつ選ばれることになりました。リレー選手になれる確立が高くなり、私は「もしかしたらリレー選手になれるかも。」と思いました。

リレー選手を決める日がきました。スタートラインに並んだ時、すごくきんちょうして、「リレー選手になれるわけない。あきらめろ。」という考えがよぎりました。先生の「よーい、どん。」

というかけ声で走り出しました。すぐに三人が自分の前を走っていきました。横にもだれかがいました。頭の中で、「せめて四位になれ。四位だったら一人休んだ時に選手になれる。がんばれ私。後少しだ。」と自分をはげま

しながら、最後の力をふりしぼってゴールしました。結局、抜かす事ができなくて、三人が先にゴールしていました。「後ちょっとだけ速ければ選手だったのに。今年も四位で補欠だな。」と思いすごく悔しかったです。その時先生が、

「後藤さん、こっちきて。」

とリレー選手たちが並ぶ場所を指しながら言いました。「なんで、四位なのに。」と思いながら行くと、二位でゴールしたクラスメートが、

「私、引っこすんだ。」

とはずかしそうにいいました。そして、

「後藤さん、選手ね。」

と先生に言われて、私は飛び上がって、「やったー」とさけびたくなりました。父は私がリレー選手になったと聞くと、

「練習いっぱいするからな。」

と言いました。父は「速く走るこつ」などのビデオをたくさん見せてくれて、近くの公園

で一緒に走ってくれました。

運動会当日。すごくきんちょうして、手が汗でしめっていました。リレーのために入場門に並ぶ直前、クラスメートが、

「がんばってね。」

と声をかけてくれました。一言でしたが、私の心に火をつけました。「みんな応えんしている。赤組のために勝つんだ。」と決心しました。

私は一年から四年まで、クラスメートの選手が走るのを見て、大声で応えんしていました。けれど今年は、私が応えんされる側でした。すごくきんちょうしていたので、深呼吸しました。はちまきを何度も結び直しました。集中しようとしている時に母がきて、

「最後まで全力で走るのよ。バトンを落とさないようにね。」

と色々言うので、集中力が途切れていやでした。

すると、

「四年生から六年生の一対抗リレー」

と聞こえました。私の足は誰かがそう作しているのかのように勝手に動き出しました。そしてついに、スタートがンが鳴り、リレーが始まりました。無言でリレーを目で追っていると、

「はい、五年生女子、五年生女子、早く並んで」

と先生の声が遠くから聞こえました。バトンを受け取り、スピードを上げていきました。バトンはしめった手から落ちそうでした。クラスメート達の声えんは全然聞こえませんでした。半分過ぎた頃、後からだれかせまってくるのが分かりました。

「白組がせまってきました」

とアナウンスが耳に入りました。「せまられてるのは、私だ」と思いました。次の瞬間となりに並ばれ、そして抜かされました。きっとあっという間のことだったけれど、私の中ではスローモーションのようでした。私はその時そのまま座りこんであきらめたくなりま

した。けれど、バトンを渡す仕事がある、と気がつき、最後の力を振り絞って走りました。私のチームは三位でした。「私がぬかされなかったら。」と強く思いました。

来年は、自分のかわりレー選手になりたいです。そして本番では、絶対ぬかされないようにします。

馬の気持ち

W校　五年二組
町田　瑞樹

あなたは動物達が人間みたいに性格や気持ちなどを持っていると思いますか？動物にも気げんや好ききらいがあると思いますか？私は最近、この事について、すこし考えが変わりました。これから、私の動物に対する見方を変えてくれた、今年のサマーキャンプについて、書いてみようと思います。

私が参加したのは、泊まりがけの乗馬キャンプでした。このキャンプで私が乗っていたのは、アクティブで元気一杯の馬、ユージーンでした。ユージーンにはテイクトットツという親友がいました。ある日、私とユージーンはレッスン中で、テイクトットツもそうでした。馬は、レッスン中はどこにも行ってはいけないという事を知っています。けれども、二頭ともおたがい会いたがっていたのです。ユージーンは私が乗っている時に悲しそうに、

耳をさげ、早足で走っていました。私はなぜそうしているのか知らなかったので、不思議でした。するとテイタートッツがこちらに向かって鳴きはじめました。するとユージーンも鳴きかえしました。馬が鳴きかえすのは友情の印なので、やっと彼らが友達なのだとわかりました。馬のように、グループで行動する動物は、こんな風に家族や親友に愛情をしめします。

ユージーンは元気一杯で、レースがとても大好きな馬です。彼には「やる気言葉」があります。「あと何分でレースよ」、「もうすぐトロットするわよ」このような言葉をかけると、すぐに耳をぴんとのばしました。どんな言葉でやる気になるかはその馬の性格によります。もし、すぐ休みたがる馬なら、その言葉は「もうすぐでレースは休みよ」になった事でしょう。それぞれの気持ちや性格が、その動物の「やる気言葉」を大きく変えるのです。

「ここまではポジティブな面についてでしたが、もちろん動物にも悲しみや心配ごとがあります。私が見たのは、馬がパニックになる場面でした。ある時、みんなでレースをしていました。その前に何回かレースをしていたので、みんなユージーンが速いということは知っていました。同じキャンプにいた私の友達はそれがうらやましくて、乗っていた馬に「行け、行け！」とさけび、無理に走らせようとしました。馬は速く、戦いにもつかわれたことのある強い動物ですが、それと同時におとなしくて、はずかしがりやな所も、あります。その馬はパニックになってしまい、急に速くかけ出して、他の馬の足に近づきすぎてしまいました。馬どうしが一・五mぐらいまで近づくと、おたがいにけられて、人も馬もけがをさせてしまう確立が高くなります。先生がその子をとめはなし、遠くに行かせたので、彼はけっきょく勝てませんでした。このように、無理に命令すると、パニックにな

てしまったり、あぶない行動をしてしまうこともあります。

私は今まで、動物はそばくでシンプルな気持ちしか持ってないと思っていました。動物園のふれあい広場などで、犬やポニーとふれあって、すなおに喜んだりしているのを見て、喜ぶ気持ちはあると思っていました。でも、悲しむところや言う事を聞かないところを見たことはなかったのです。

このキャンプに行ってから、馬によっていろいろな性格がある事がわかりました。好きな物が日によって変わる馬もいれば、好きらいがはっきりしている馬もいました。このキャンプを通して、私は動物にもうくざつな性格がある、ということを学びました。他の動物にもそのような気持ちや性格があるのか、観察したり、調べたりしたいと思います。

写真の日

L工校　四年一組
金　太悟

十月七日は学校で写真をとる日でした。親友のマックスは、いつもよりもいいシャツを着ていて、アレンはちょうネクタイをつけていました。ぼくは写真の日だという事を知らなかったので、いつものTシャツと、いつものズボンと、いつものくつ下にくつをはいていました。しょうがないので、いつものかっこうで写真をとりました。

家に帰ってお母さんに、

「今日、学校で写真の日だったんだよ。どうして教えてくれなかったの。」

と言うと、

「本当にごめん。わすれてた。」

とお母さんが言いました。どうしてお母さんがこんな大切な日の事をわすれてしまったのかぼくには分からず、少し悲しくなって卒業アルバムに使われるという写真の事をずっと考えていました。

お父さんが帰ってきたので、今日の出来事を話しました。すると、お父さんは、

「お、太悟のお気に入りのTシャツとズボンで写真をとったんだ。太悟らしくていいよ。」

と言いました。たしかに、いつものTシャツとズボンだったけれど、両

方ともぼくのお気に入りでした。お気に入りなので、お母さんが洗たくをすると、ぼくがいつも選んで着る組み合わせです。

「みんなもこの太悟の写真を見るとき、」といつもの太悟のことを思い出してくれるよ」。

とお母さんが言いました。

十一月に写真のとり直しが出来るけれど、ぼくはこのままの写真にしようと決めました。ぼくらしいと思ったからです。でも、

「来年の写真の日はちゃんとおぼえておいてよ」。

と言うと、お母さんとお父さんは楽しそうに二人で笑っていました。何

だかぼくも楽しくなって笑ってしまいました。

16×16

にが手だなと思う前に

L工校　三年　一組

クラーク　和馬

九月十五日の日曜日、今年のさいしょのフットボールのし合がありました。ヘルメットやパッドをつけてぶつかり合う、アメリカンフットボールのことです。このし合でぼくは長いパスを三回も落としました。ハンドオフも落としました。それからディフェンスでも相手をタックルしなきゃと思っても全力では一回もできないまま、し合にまけてくやしく家に帰りました。お父さんとお母さんも何かをためしっている ぼくに気がついていました。お父さんとお母

さんは、ぼくのプレイを見てぼくに、
「あなたは本当にこのスポーツをつづけたいの？」
と心配そうに聞いてきました。
ぼくはもうやりたくないのか。ぼくはまだつづけたい。どうしてかと言うと、本当はもっとうまくできると心で分かっているからです。でも、ぼくはまだ何をどうしたらいいのかがよく分かりません。だから、ぼくはフットボールについて文モを書いてみることにしました。そのメモには、にが手なプレイや、どうしてにが手なのか、ぼくが心配していることとは何か、などを全部書きました。たとえば、ぼくがにが手なのはデイ

フェンスとして人にタックルすることです。このことはメモに書かなくても分かるし、お父さんとお母さんもぼくのプレイを見ただけで分かっています。どうしてにが手なのか。その答えはすぐに出ませんでした。自分でもにが手な理由は考えてみないとすぐには分かりません。紙とえんぴつを持って考えてみました。いたいからかな。どきどきもするな。でもそれよりも、ぼくがタックルしたら相手が倒れなかったらどうしよう。はずかしいな。かっこわるいな。でもちょっとまて、もしタックルしないまま相手にぬかれてタッチダウンされたらもっとはずかしくないか。

やっぱりそうだ。次のゲームでは、
こわがってる場合ではない。
オフェンスでは、ハンドオフの時
にファンブルをしないでボールを持
ってエンドゾーンまで全力で走れて
いないのがぼくのにが手な所です。
一体どうしてにが手なのか。いたい
からかな。どきどきもするな。ここ
まで書いてはっと思いました。ぼく
が何かのことをにが手だなと思う時
それをやる前に心配して、どきどき
してしっぱいしたらどうしようと考
えているうちに、タックルをしそび
れて、ハンドオフを本当にファンブ
ルしてしまいます。ぼくは自分の頭
で、これがにが手とそれをする前か

らにげている事が分かったのです。

このメモを考えてるうちに、次のし合が始まりました。また前半にパスを二回落としました。すごくがっかりしたけど、しっぱいした事をわすれなくちゃ、次はぜったいとれるとしんじる事にしました。そしてさい後、また同じプレイでぼくは全力でボールをとりに行きました。走って走ってエンドゾーンまで走って着いた時、ボールはぼくの手の中にしっかりとありました。

16×16

アメリカはこんなにちがう

W校　三年　一組

守屋　眞

わたしは、母の仕事の関係で、昨年の九月二十五日にアメリカに来ました。わたしと父は海外に住んだことはありませんでした。今からアメリカに来てびっくりしたことをしょう介していきたいと思います。

まず、アメリカに来てびっくりしたのは家でした。日本の家とはちがって、広いしばふの庭があったり、サンタさんが出てきそうなだんろがあったりしました。庭には、りすやうさぎも遊びに来ます。夏には、バーベキューや、おにごっこ、すいかわり

16×16

もしました。どれも日本の家では、できないことです。

家よりもびっくりしたのは、学校の色々のちがいです。まず、通学方ほうがちがいました。日本では一人で電車に乗って学校に行っていました。アメリカではみんながバスか車で登校します。わたしは家から学校が近すぎるのでスクールバスに乗れません。毎日父に車で送ってもらっています。日本では通学に一時間かかっていました。なんとアメリカでは三分、たった三分です。アメリカは楽だけど、日本は友だちと行けても楽しかったです。

次にびっくりしたことは、先生と

クラスのよびかたです。日本では○先生とよびますが、アメリカではミズ○○やミスター○○とよびます。クラスも○年○組などではなく、ミズ○○のズクラスと言います。

わたしはさいしょえい語が話せなかったので、みんなにバカにされたり、いじわるされたりするのではないかと、ハラハラドキドキしていました。けれど、いざ学校に行ってみると、みんなせっきょくてきに話しかけてくれて、とても楽に仲間に入ることができました。

他にもおどろいたことはたくさんありますが、たとえば、日本では授業の間に休み時間がありましたが、

アメリカではリーセスという休み時間が一回しかありません。お昼休みも日本は五十五分ありましたが、こちらは二十五分です。日本ではきゅう食でしたが、こちらはランチにするでは野さいが出ますが、こちらの友だちのランチは、オレオとたたきゅうりとプレッツエルスティックです。

そうじはしなくてよく、トイレはじゃぎょう中にいつでもいって大じょうぶです。教室にはアイパッドがあったり、黒板ではなくホワイトボードがあったり、みんなであぐらをかきながら先生の本の読み聞かせを聞くカーペットもあります。

16×16

日本では女の子だけで遊ぶことが多かったですが、こちらでは、男の子たちとおにごっこをすることがふえました。こちらの男の子は女の子にもやさしくしてくれます。

わたしは日本から来るときないていました。けれど、来てみると楽しいことが山ほどありました。アメリカに来てちょうど一年たちなれてきました。はじめは何もかもがびっくりでした。今はそのちがいもうけ入れられるようになりました。三年生になったべん強もむずかしくなってきました。日本からアメリカに来れたわたしなら大じょうぶです！

16×16

楽しいニューヨーク補習校

W校　三年二組

田實　友

わたしは、はじめてニューヨーク補習校に入った時、かいだんや長いろう下があったので、どこにどうやって行くのかおぼえられるか少し心配でした。学校の人に図書館やカフェテリアなど、いろんな場所をあんない内してもらいました。図書館には、日本語の本やまん画がたく山ありました。わたしの大すきな本もあって、とてもワクワクしました。

次の土曜日には、学校が始まりました。はじめてわたしの教室に入る日です。わたしは、教室がどこにあ

るのか分からなかったのですが、友だちのお父さんが教えてくれました。教室に入る時、とてもきんちょうしました。きんちょうしすぎて、自分のせきを見つけるのが、ちょっとむずかしかったです。やっとせきを見つけてすわると、だんだん落ち着いてきました。わたしは、この一日目で、女の子全員と友だちになることができました。こんなに早く友だちを作れて、うれしかったです。

そして、何回も学校へ通っているうちに、どんどんなれてきました。今は、クラスの子全員と友だちです。わたしの名前は、たくさんの友だちができますように、とお父さんとお

母さんが考えてくれました。だから、いっぱい友だちができるのは、すごくしあわせです。

先生は時どき、動物クイズと言うクイズを出します。先生がかっている犬の鼻を大きくうつした写真を見せながら、

「これなんの動物でしょうか。」

と聞いたので、わたしたちは、

「犬。」

と答えました。そして、先生は、

「みんなトラやライオンと言うのかと思った。」

と言いました。動物クイズは、かんたんで面白いです。

九月には、うん動会がありました。

わたしたちのクラスは白組でした。
わたしは、玉入れが一番楽しかったです。つな引きでは、白組が一回かって、赤組は二回かったので、ぎゃく点されたかと思いました。けれど、さい後に点数を出した時、白組が二点さでかったので、みんな大よろこびでした。
いろんな体けんのできるこのほうが後クラブしもすごく楽しいです。わたしは、物を作るのがすきなので、スイーツクレイデコというねん土を使ったクラブや、リボンを作るクラブをやりました。日本の小学校では四年生からクラブのじゅぎょうがあるそうです。日本に帰ったら、こん

16×16

なクラブがあるといいなと思います。

わたしは、今年の四月から、何回もニューヨークほ習校に通い、友だちもいっぱいできました。アメリカの学校では体けんできないこともできて、本当に楽しいです。これからも、日本語のべん強をみんなと一しょにがんばりたいです。

楽しかったチョコレートぼ金

W校　三年四組

福井　菜央

「チョコレートバーいかがですか。」

みんなの声が道路にひびきました。

先日、小学五年生の近所のお友だちのぼ金活動のお手伝いではじめてチョコレートバーを売りました。

まずお店を開いていることがすぐに分かるように、かざりつけをしました。そして、つくえを出してかんばんを作りました。かんばんには一目で分かるようにチョコレートの絵と、ねだんは一ドルと書きました。

さあ、じゅんびは出来ました。いよいよはん売開始です。どんな人が

買ってくれるのかな、この家の前をだれも通らなかったらどうしようと考えると少しふ安でした。そこでみんなで話し合い、二人がかんばんを持ち、あとの二人がよびこみ、一番年長のお姉さんがおつりになるお金を持ちました。

すると、遠くから三人の学生が歩いて来たので、みんなで話し合ったやくわりでちらばりました。三人に声をかけると、

「ごめんなさい。今はお金をもっていないからまたあとで来るね。」

と言いました。少しがっかりしたけれど、思い切って声をかけてよかったなと思いました。この調子でいけ

ば、もっと売れるかもしれないと感じました。それからは、近くの学校のそばまで行き、人や車が来るのを待ちました。道路を走る車にかん板を見せていると、一台の車が止まりました。まどをあけておじさんが、

「チョコレートバーを五本下さい。このチョコレートは、まごが大好きたんだ。」

と言ってくれました。私たちは、大きな声でお礼を言い、みんなでガッツポーズをしてよろこびました。

次にようちえんのそばにいどうしてお母さんたちに声をかけると、よろこんでたくさんの人たちが買ってくれました。

このけいけんを通しておどろいたことは、アメリカの人たちは、ぼ金活動にきょうカしてくれるとても親切な人が多いんだなと思いました。

私ももし同じように学校のぼ金活動をしている人がいたらぼ金をしてあげたいです。

今回は、なれないえい語でしたが、知らない人にもゆう気を出して行動すれば気持ちはつたわるんだと分かりました。

リレーのせん手

W校　二年三組
長谷　あがさ

わたしは、今年のうんどう会で、リレーのせん手にえらばれました。わたしは、きょ年はほけつだったので、リレーに出れませんでした。だから、リレーのせん手をきめる時、いっしょうけんめいにはしろうと思いました。

「いちについて、よういー。」

と、先生の声が聞こえました。わたしの心ぞうが、ドキドキしているのがわかりました。

先生のスタートの合図でわたしは、とび出しました。なにも考えずにゴールにむかって、まっすぐにはしりました。

わたしは、一ばんでした。

先生が、

「リレーのせん手は、あがさちゃんです。」

と言った時、わたしは、とびあがるほどうれしかったです。

うんどう会の日、リレーのじゅんばんがきました。

わたしは、スタートラインで、ドキドキしながらバトンをまっていました。わたしのチームは白組でした。

わたしは、バトンをもら

うと、いっしょうけんめいにはしりました。風が顔に当たって、とても気もちがよかったです。

来年も、リレーのせんしゅになりたいと思いました。

ぼくのいもうと

W校　一年三組

竹田　佳生

ことしの六がつに、ぼくにいもうとができました。なまえは、あかりちゃんです。ぼくがだっこをしたり、となまえをよぶとにっこりわらいます。

「あかりちゃん」。

あかりちゃんは、よくおっぱいをのみ、なかなかはっ

なしません。おなかがすくて、口にきをいれて、大きなこえでなきます。

おなかをしたにしてねころがっていること、きゅうにねがえりをうちました。すごいとおもいました。おかりちゃんのくびとうでは、とてもちからづよいです。

このホいだ、ショッピングモールにいったとき、ふんすいにコインをいれて、

おねがいをしました。

「あかりちゃんが、げんきにおおきくなりますように。」

と。

はやくあかりちゃんがおはなしをするようになり、いろいろなおはなしをしたいです。

そめものにちょうせん

W校　一ねん四くみ
千田　えま

わたしは、おかあさんといっしょに、ハンカチをそめました。まずハンカチにもようをつけるために、はしをむすんだり、ビーだまをつつんだり、おりめをつけてわごむでとめたりしました。わたしは、どんなもようになるのかなとおもいます。

ました。

つぎに、たまねぎのかわをなべにいれておみずといっしょににました。わたしは、「どんないろになるんだろう。」。

とおかあさんにいいました。おかあさんは、

「にじるがあかちゃいろだから、ちゃいろかな。」。

といいました。

にじるにハンカチをつけて

しばらくまちました。

わたしは、

「ちゃいろのハンカチは、ちょっといやだな。」

とこころのなかでおもいました。

それから、みょうばんのはいった水につけたら、いろがかわって、きいろになりました。さいごにむすびめやビーだまをとったら、いろいろなもようができて

いました。わたしは、すてきなもようでうれしかったです。ちゃいろではなくて、きいろになったので、びっくりしました。